

Pragmatist としての Emerson

——彼の思想における二元性の問題——

小 泉 一 郎

I am the practical Idealist.

—Emerson's *Journals*, March 5, 1836.

I

若いころ船員生活を送ったあとでメソヂスト派の牧師になり、1850 年ごろ Boston で船員たちを相手に傳道を行っていた Father Edward Taylor (1793-1871) は、Concord の教會へも説教に出かけて、Emerson をはじめ Hawthorne 夫人などをその特異な説教によつて魅了した人物であるが、彼自身は Emerson の説教を聴いたあとで次のように語っている——。「Emerson 氏は神がつくつた最もうるわしい人間の一人である。機械のどこかに、一本ねじがゆるんでいるところがたしかにあるのだが、ぎいぎい軋る音が聞えないので、それがどこなのか判らない。彼はきつと死んだあとで天國へ行くに相違ない。なぜなら、彼が地獄へおちることがあつても、悪魔は彼をどう扱つたらよいか途方に暮れるに相違ないからだ。」¹

自分に近づくすべての人間を、静かな、高い、淨らかな雰圍氣の中に包んでしまつて、聴衆は彼の講演の内容よりも、宗教的な音樂を想わせる、その高貴な人格の暈輪に惹かれて群がり集まつたといわれるが、「ねじが一本ゆるんでいる」不満を感じたのは Taylor ばかりではない。人生における惡の存在を、かたくななまでに否定する Emerson の態度に、救いがたい限界を認めざるを得なかつた人間は多い。

人間が自然のままの生を送り、自分のものでない厄介な問題を自分の心の中へ持ちこんで來ないならば、知的生命は淨らかに健やかに保たれるであろう。何びとも、抽象的思辨の中で思い悩む必要はないのである。...わが國の青年たちは、原罪とか惡の起源とか豫定説とかいつた、神學的問題の病氣にとりつかれている。このような問題は、いかなる人間に對しても、實際的な困難をかもしだしたことはなかつた——おのが道を離れて殊更にこうした問題を追い求めぬ限り、何びとの行路をも暗くしたためしはないのである。これらの問題は、魂の「おたふくかぜ」であり、麻

1 Cf. F.O. Matthiessen: *American Renaissance*, p. 183.

疹であり、百日咳であつて...天真爛漫な心はこのような敵を認めないであろう。¹

William James (1842-1900) が「宗教的経験の諸相」(*Varieties of Religious Experiences*, 1902) の中で、人間を「一度生れの人間」と「二度生れの人間」(the once-born and the twice-born) という二つの類型に分けた Francis W. Newman の深い示唆を發展させて、「健全な精神の宗教」と「病める魂の宗教」という二つの宗教、というよりも二種の人間精神の構造の分析を行っているのは周知の通りであるが、彼が引用している、上述の Emerson の言葉からも明らかなように、Emerson はいうまでもなく「一度生れの人間」であり、その信仰は「健全な精神の宗教」であつた。「私は世界中に私の健康を弘め、この世界を強い、幸福な、有用なものにするのだ。病人にとつては、世界は藥箱にすぎない」。² Emerson が青年期から壯年期にかけて、生活の危機を幾たびか経過したのは事實であるが、彼の精神の歴史には、「回心」(Conversion) の経験は認められない。自我の徐ろな確乎たる成熟と自己確認の歴史があるだけである。ニュー・イングランドを二百年のあいだ支配して來たカルヴィン主義の峻嚴な原罪意識も、彼にとつてはひとつの病氣、しかも青年時代のある時期に一度罹れば一生ふたたび犯される心配のない麻疹にすぎないのである。妻や弟を次々に死の手に奪い去られても、空氣はやはり甘く、太陽は彼の大空から取り去られはしなかつた。一切の悲しみは、不垢不淨不増不減の「大靈」(the Over-Soul) の世界に抱きとられて消えてしまう。「私の悲しみ——それは悲しみというものが私に何も教えてくれず、それが眞實というものにただの一步も私を近づけてくれなかつたことだ」。³

Emerson のように、人生の惡や不幸に對して不感性としか思えない、あまりにも健康な樂天的な魂は、William James にとつては、いわば一階建の家屋に似た、簡単な精神構造の所有者として考えられた。これに對して、有名な懺悔録を残した聖オーガスティンやトルストイのように、絶えずいたましい靈肉相剋の苦惱にさいなまれた、分裂した自我の所有者——「病める魂」は、二階建の、複雑な構造をもつた家屋にたとえられよう。彼等は宗教的回心によつてしか自我の統一——生の平和に到達することができない。彼等の新生はただ死の苦惱を通してのみわがものとすることができる。

しかしながら、Emerson は果して一階建ての家に比せられる、單純な精神構造の持主だつたのであろうか。「各々の部分と分子がみな等しく關係づ

1 *Essays: First Series*, "Spiritual Laws."

2 *Journals*, March, 1843.

3 *Essays: Second Series*, "Experience."

けられている 普遍の美——久遠の一者 (the eternal One)」の存在を説いた彼は、また、他方において、現實の我々が「連續の中に、區分の中に、部分、分子の中に生きている」¹ ことを認めているのではないか。すでに彼は、1837 年に行われた有名な講演「アメリカの學者」(“The American Scholar”)において、この世界の原初に存在していた「全人」(One Man) がやがて分裂し、「不幸にも、この根源的な單位、この力の源が多數の者に分與され、細分され、小賣りされたために、こぼれて滴^{しずく}となり、元通りに集めることが不可能になつた」ことを語っているのである。

Transcendentalist または神祕家としての彼は、多様性 (Multiplicity) の基底にある統一 (Unity) を信じて、それを生活の最後の根據としたが、多くの神祕家に見るように、絶對者への魂の飛翔と合一の歡喜をうたうことをもつて満足しなかつた。しかも、對立と矛盾にみちた相對の世界、多様性の世界を、彼はただ不幸な、克服すべき分裂の世界とのみ見たのではないことは確かである。むしろ、絶對の世界と相對の世界の双方に眼を放つて、この兩者の間に、危うい平衡感覺をたのしんでいた人間ではなかつたかとさえ、私には思われるのである。その意味で、彼は決して一階建の單純な家屋ではない。高い無限な空間を仰ぎみる彼の「透明な眼球」² は、また、地上の人間の世界を、飽くことのない好奇心をもつて凝視する。Emerson の獨自性は、いわゆる Transcendentalist だつたことにあるのではなく、神祕家の法悅と世俗的叡智と、ロマン主義的高揚と現實家の犀利な眼光と、哲學者と社會批評家と、このような相對立するものを一身に兼ねそなえていた點にある。Transcendentalist と呼ばれている彼の著作をすこしく注意して讀んでみるならば、純粹な Transcendentalism が表現されているのは、“Transcendentalist Manifesto” ともいうべき處女作「自然論」(Nature, 1836) と「第一エッセイ集」(Essays: First Series, 1841) と二卷にすぎないことを發見してひとは驚くに相違ない。「第二エッセイ集」(Essays: Second Series, 1844) において、Emerson は、早くも神祕主義の山嶺から地上へくだり始め、以後は、「代表的人物論」(Representative Men, 1850)「英國國民性」(English Traits, 1856)「處世論」(Conduct of Life, 1860) と、いよいよ日常性の世界へ下降し、最早われわれは、ふたたび、法悅にみちた彼の「大靈讃歌」を聞くことは不可能になるのである。

1 Essays: First Series, “The Over-Soul.”

2 Cf. Nature, 1836.

II

Emerson を事實上の精神的指導者とする “Transcendentalist Club” が結成され、Boston のユニテリアン派の牧師 George Ripley の家で第一回の會合がもたれたのは、Emerson の *Nature* が出版されたのと同じ年同じ月の 1836 年九月である。ニュー・イングランド文化の歴史に一時期を劃するこの思想運動は、人々の注視の中に次第に成長し、1840 年七月には、機關誌として、季刊 “Dial” が Margaret Fuller を編集者として創刊され、さらにその翌年 1841 年の春には、Transcendentalism の社會的實踐として、Boston 郊外の West Roxbury に、“Brook Farm Institute of Agriculture and Education” がつくられる。George Ripley をはじめとして、人生の傍觀者としてあらゆるものにつねに懷疑的な冷たい眼を注いでいた Hawthorne さえも、ニュー・イングランドに澎湃として起つてきた、改革への理想主義的熱情に感染して、わが國における武者小路氏の「新しき村」に比せられるこの共產村に身を投じている。

Transcendentalists の運動がこうして最高潮に達してゆくとき、Emerson は *Essays: First Series*, (1841) を出版し、この書に收められた “The Over-Soul,” “Self-Reliance,” “Spiritual Laws” などにおいて、詩的に高揚された精神をもつて Transcendentalism を精一杯にうたいあげていることは周知の通りであるが、同じころ彼が Boston 市内の各所で行つた講演、たとえば、“Man the Reformer” (1841), “The Conservative” (1841), “The Transcendentalist” (1842) 等においては、いわゆる “Transcendentalism” なるものに對して痛烈な批判を行つてゐることは、注目すべき事實である。徹底した個人主義者である Emerson は、Brook Farm の共同生活への参加は、「現在の自分の牢獄から、すこしばかり大きな牢獄に移轉すること」にすぎないと考えて、遠くから興味と同情をこめた眼をもつて眺める態度をとつてゐる。この Brook Farm を Margaret Fuller などと共に訪れた彼は、この「新しき村」が、要するに「ピクニックの連續、小型のフランス革命、菓子なべの中の『理性の時代』」¹ にすぎないことを見抜いていたのである。

Emerson の 1842 年三月二十三日の日記を見ると、*Little Women* を書いた Louisa May Alcott の父親で、Transcendentalism の熱狂的な使徒だつた Amos Bronson Alcott (1799-1888) に對する、十頁近い批判が見出される。

1 Cf. R.L. Rusk: *The Life of Ralph Waldo Emerson*, p. 291.

この日の二日前に、彼は、英國へ旅立とうとしている Alcott を紹介する手紙を Carlyle あてに書いているが、それを書いているうちに、すでに過去七年間彼の身邊にあつたこの典型的な idealist に對するの自分の觀察を存分に書きとどめておきたいという氣持になつたらしい——。

彼は理念の人であり、信仰の人である。…彼が愛するのは思索であつて行爲ではないことを認めねばならない。だから彼はあらゆる人々に不満を感じさせ、多くの人間をうんざりさせる。談話が終れば、それですべてが済んでしまうのである。彼は今日も明日も、ただもつとお談義をするために生きている。新しい天上的な生活を送るのだと誓いながら、いつかなそうした生活を始めようとしな。…思索に對するこの極端な愛情を示すもうひとつの事實が存在する。彼は自分の意見や生き方のすべてを手にとって歩く。ところで、彼と話をしていると、彼という人間がまるで根というものをもたない、宙に浮いた植物みたいなもので、いつ何處に移し植えても別にわるい結果を生じない植物であることが判る。彼は、活氣にみちたお談義の間に沸々と湧きあがつて來た新しい夢を實踐に移すためには、いついかなるときでも、猶豫なく、自分の現在の住居も職業も、祖國も、いな自分の妻子さえも棄ててしまう覺悟ができてゐる。

これは Alcott という人間に代表された Transcendentalism に對する Emerson の批判であることはいうまでもない。同じ年の一月に Boston の Masonic Temple で行つた講演 “The Transcendentalist” には、Transcendentalism へのさらに包括的な、假借ない批判が見出される。彼はまず「一般に “Transcendentalism” と呼ばれているものは、Idealism——1842年にひとつの形をとつた Idealism である」と規定し、Idealism の時質を、Materialism との對比によつて明らかにしているが、この講演全體は決して Transcendentalism の擁護ではなく、むしろ Emerson 自身の自己診斷と稱すべきものであつて、この講演の最も精彩のある部分は、彼自身の、ひいては Transcendentalists のもつ本質的な弱點を容赦なく摘抉している部分であると言つても過言ではなからう。

ここで彼が衝いているのは、超絶主義者たちの孤高と無爲とである。彼等は一般人の勤勞から、市場の競争や政界の暗闘から身をひき、或る孤獨な、批判的な生き方に身をゆだねている。彼等の書くものにも、彼等の談話にも、孤獨が漂つてゐる。彼等は外部社會の影響をすべて斥け、ともすれば自分の部屋に閉じこもつて、自分の仕事と楽しみを孤獨の中に求め、都會よりも田園に住むことを好む。社會は、もちろん、こんな彼等に好意をもつ筈がない。あらゆる人間は俺の友人たるに値いしないという顔つきをしている 彼等は、禮儀をわきまえぬ、怪しからぬ者として、社會から復讐を受ける。ところが、こ

うした孤獨は、彼等の内部に立ち入つて考えれば、氣まぐれでも何でも無い。いわば、選ばなければならぬ二つの惡の中から、小さい方の惡を選んだのにすぎない。彼等は決して陰鬱な人間ではなく、天性は明るい、敏感な、情愛の深い人間、誰からでも愛されたい人間、他人の中に高い美しい人間性を見出せば、そこに一番生き甲斐を感じるような人間なのである。しかし、彼等は、宗教的で眞摯であればあるだけ、好奇心を満足しようとだけかかっている人間との無駄話を嫌う。以心傳心で語り合えるような人間となれば、日の出から日没までも語ろう。しかし、くだらぬ噂話で自分を漬したくはない——。要するに、人間への要求が過大であるために、孤獨へ退かざるを得ない人々なのである。

彼等は一般人との談話を避けるだけでなく、あらゆる勤勞から身をひく。彼等はよき市民ではない。公私の義務さえも不承不承に果し、人道主義的な社會事業にも強い關心を示そうとしない。「超絶主義」とは「怠惰」の別名ではないかという批判の聲があがる。

われわれは無爲のために不幸になつている。われわれは休息と無爲のため滅びようとしている。だがわれわれは君の仕事は嫌いだ。

「それならお前の仕事を見せろ」と世間の人々が言う。

「われわれには仕事がない」

「そんなら何をする氣だ?」と世間の人々が叫ぶ。

「待つのだ」

「いつまで?」

「宇宙が起ちあがつて、われわれに仕事をしろと命ずるまで」

「だがお前が待つているうちに年をとつて無用な人間になるぞ」

「そんならそれでもいい。自分はどこかの片隅にいて、そこで（君の言葉で言えば）滅びるまでだ。とにかく、いと高きものに命ぜられるまでは自分は動かぬつもりだ」¹

すでに、“Dial”が創刊された當時、Carlyleは遠く英國から書を寄せて、この雑誌にみちている「肉體なき靈」「大氣のような、北極光のような」捉えがたさに警告を發したが、今また Emerson に次のような手紙を書いている。

私は君たちの“Dial”が好きだが、一寸ぞつとするものを感じる。君たちはこの現在の世界の「事實」から自分を引離す危險に陥つてるように私は思う。この世界はたしかに醜惡なものだが、ただそこにだけ私は錨をおろすことができるのだ。君たちは理念や信仰や啓示などを求めて天がけり、氷點下の危險な高所に舞いあがるのだ。²

1 “The Transcendentalist.”

2 Cf. Oliver Wendel Holmes: *Ralph Waldo Emerson*, pp. 162-163.

Emerson 自身、Carlyle の指摘を俟つまでもなく、Transcendentalism の現實無視の傾向の危険を十分に意識し、みずから戒めていたことは、そのころ書かれた次のような日記の一節からもあきらかである。

高貴な頭腦、犀利な眼、だが、ああ、彼は手をもたない!¹

われわれは、インクで書いた本に對して、肉と血で書いた本をもつて答えよう。²

事實に優位を與えること、事實を選択すること——それには天才を必要とする。エゴティストの貧寒さ。³

「理想主義」。保守主義者の側に對しては、今まで言われて來たよりも多くの美點を挙げられるように思う。たしかに、或るめざましい、高遠なものを立證する責務は理想主義者の側になければならぬ。が、理想主義者に缺けているのは、世俗的人間のもつ力なのだ。⁴

事實、1841 年十二月九日、Boston の Masonic Temple で行つた「保守主義者」(“The Conservative”) と題する講演においても、彼は、當時アメリカの思想界を兩分していた改革派 (Innovation) と保守派 (Conservatism) との對立と兩者の特質を論じているが、保守派の長所を公正な態度で認めているというよりも、むしろ、Emerson 自身がその指導者と目されていた、改革派 (理想主義者) の弱點の指摘において嚴格であると言つた方が當つてい

るであろう。

Emerson が保守主義者の中に認めて畏敬の念を禁じえなかつたのは、彼等が、「不可避的なもの」(the Inevitable)——冷嚴な「事實」(fact) に對して、つねに服従することを忘れないという態度であつた。彼等が保守主義者であるのは、「良心」の命令によるものではない。打勝ちがたい「事實」が、否應なしに彼等を保守主義者たらしめるのである。良心の命ずるところは、本質的にいえば絶對的なものであるが、歴史的には、相對的なものでしかない。これに對して、叡知が求めるのは、寸分の狂いもないという、杓子定規なものではなく、實際役に立つもの、人間の能力や現實の事態が保證を與え得るものである。だから叡知は保守主義者に味方する。理想主義者は、或る正當な行爲の特異點を極端にまで押しつめる結果、彼自身の天性と自然の一切が彼にはげしく反噬を試みるようになる。叡知は、みずからの力に釣合わない、途方もない大事を企てることがないのに對して、理想主義者は、自分という人間のなかにまだしつかりと根をおろしていない夢に盲目的に身を投

1 *Journals*, August 3, 1842.

2 *Ibid.*, July, 1841.

3 *Ibid.*, August, 1842.

4 *Ibid.*, July, 1841.

げかけて、結局わが身をほろぼしてしまふ。「自然」を「超越」(transcend)しようとした「超絶主義者」(Transcendentalist)が、われとわが身に招いた天罰である。自然の復讐である。現實の世界は夢ではない。これを夢であるかのごとく取扱うとき、必ず刑罰を受けずにはいないからである。神聖なのは「事實」である。「事實」は現實の生命をもつ故に「事實」として存在したのだから、われわれはまず「事實」を尊重することを學ばなければならない。

III

普通「超絶主義者」として知られている Emerson の内部に存在するこうした矛盾や二元的なものは、仔細に検討してみると、彼の超絶主義なるものの中核を形成している若干の思想そのものの中にすでに内在していたことが明らかになる。彼の搖籃時代から晩年にいたるまで、生涯を通じて彼を惹きつけ、「精神の世界の標語」として、悲しみの時にも歡びの時にもいよいよ深い意味をひらき示してくれた、と彼自身が語っているのは、「報償」(Compensation)という觀念である。暗黙のうちに、かつ確實に、あらゆる祕密は明るみへ出され、あらゆる犯罪は罰せられ、あらゆる徳は報いられ、あらゆる不正は矯正される。快樂を受け容れる機能は、これを濫用するとき、それ相應の所罰を受ける。何ものかを失つたところでは、必ず他に何ものかが獲得される。甘いものには必ず酸味が伴う。過多は缺陷を生み、缺陷は過多を生む。海はつねに平衡を求め、浪の波頭は必ず崩れて、平らな水面に戻る。

報償の原理がこのように自然と人事を支配するのは、世界の一切が二元的なものから成つてゐるからである。兩極性(Polarity)はあらゆるものの中に見出される。動があれば反動がある。光があれば暗がある。炎熱と寒冷、潮の干満、男性と女性、動植物の呼氣と吸氣、心臓の收縮と伸長、重力の遠心力と求心力と——一切は對立するものから成つてゐる。針の一端に磁力を加えると、他の端に反對の磁力が生ずる。南方が牽引すれば、北方は反撥する。此處を空虛にするためには、彼處を壓縮しなければならない。物質と精神、偶數と奇數、内と外、上と下、動と靜、然りと否——二元性(Dualism)は自然を否應なしに兩斷している。すべてのものは半分であつて、みずからを全きものとするために、つねに他のものを暗示している。

だから Emerson は、前述の「保守主義者」と題する講演においても、保守派と進歩派について次のように語つてゐる。

この二つの形而上學的敵對者について間違いなく言えることは、そのいずれも、よき半分ではあるが、全體ではあり得ないということである。各々が相手のもつて

いる悪弊を暴露しようとする。しかしながら、眞の社會、眞の人間においては、この両者が結合しなければならない。自然がその贅意の冠、すなわち美の冠を與えるのは、何であれ一つの行爲あるいは表象あるいは行爲者ではなくして、これらの要素をすべて結合しているものに對してである。世々代々浪に抵抗する巖に對してでもなく、絶えず巖にうちあたる浪に對してでもない。至高の美は、無數の枝をもつて世紀の嵐に耐えて立ち、來る年ごとに若木のように成長してゆく樫の樹と共にある。あるいは、つねに動き流れながら、しかもつねに川床を變えぬ河と共にある。

Emerson がここで理想的な社會と人間として腦裏に思い描いていたのは、樫の樹と共につねに連想される英國と英國民ではなかつたかと思われる。後年「英國の特質」(*English Traits*, 1856) の中で述べているように、相反する多くの要素をその内部に渾然と融合しているのは、實に英國社會と英國民に他ならないからである。

「報償」の觀念と並んで、Emerson の思想の核心をなすものは、われわれの思想と行動における「無意識な自然性」(Spontaneity) の尊重である。人間の魂の中には、宇宙に遍滿する大靈 (the Over-Soul) の力が絶えず流れこんで來る。「永遠の一者」(the eternal One) なる大靈の無盡藏な力に比すれば、人間の意志の力は、とるに足らぬ、脆弱なものにすぎない。われわれの周圍に毎日起る事柄をすこしく考察すれば、われわれの意志より高い法則があらゆる事件を規制していることが明らかになるであろう。われわれの意志から發する苦しい營爲は、所詮無益な、不必要なものであつて、單純な、氣樂な、自然な (spontaneous) 行爲においてのみ、われわれは強い人間になることができる。われわれの意志より高い法則に服従することによつてのみ、われわれは聖なるものとなることができる。信仰と愛——信する愛のみがわれわれを心勞の重荷から解きはなつてくれる。われわれの道德性を汚すのはむしろわれわれ自身の卑少な意志の干涉ではないか。われわれは或る人間の性格を、彼等が衝動的 (impulsive) であり自發的 (spontaneous) であればあるほど好ましく思う。一人の人間がおのれのもつ美德について考えること知ることが尠なければすくないだけ、われわれはその人間に好感を覺える。最上の勝利とは、泉の迸り溢れるような勝利でなければならない。

われわれはただ服従すればよいのだ。われわれ一人々々に卽した導きというものがあるのであつて、それに對して謙虛に耳を傾けることによつて、われわれは正しい言葉を聞くことができる。何故君はそんなに苦しんで君の位置と職業と交友と、行動や娛樂の方式を選ぼうとするのか。... 萬物をのせて漂い萬物に生命を與える、あの力と叡智の流れのただなかに君の軀を置くがいい。そのとき君は勞せずして眞理と正義と完全な満足へと、否應なしに到達するのだ。...

私は言う、選ぶなかれと。もちろんこれは言葉の綾にすぎないが、こんな言葉の綾によつて、私は、普通選擇と人々に呼ばれているものを示したいのである。それは部分的な行動、手や眼や色食の慾望の選擇したものであつて、その人間の全的な行動ではない。¹

われわれの無意識な、自然な行動こそつねに最善のものである。いかなる熟慮や注意をはらうよりも、ひとはその自然な、無意識な一瞥によつて、或る問題の核心へ迫りうるものなのだ。たとえば、前の晩眠る前に考えた問題が、翌朝寢床から起きて戸外の朝の大氣の中を歩くとき明らかになるようなものである。われわれの思索とは、敬虔な心で大いなる力を受け容れることに他ならない。われわれの思索上の眞理は、あまりにこれを閑却することによつてそこなわれるように、また、われわれの意志の亂暴な指圖によつてそこなわれるのである。²

ところで、「無意識な、自然性」は何によつてわれわれのものとなるのだろうか。

われわれの進歩はすべて、植物の芽に似たひとつの開展である。まず本能があり、それから意見が生れ、さらに知識を得る——丁度植物が根、次に蕾、次に實を生ずるように。理由をあげられなくともいい、最後まで本能に信頼せよ。本能をせきたてても無益である。最後まで信頼してゆけば、それは熟して眞理となり、なぜ自分が本能を信ずるかが判つて来るだろう。³

「二三の強い本能と、二三の簡明な規則」——それだけでわれわれは充分である。⁴

前述の「超絶主義者」と題する講演においても、Emerson は、完全な、純粹な超絶主義者はまだ人間の歴史の中にも周圍の生活の中にも一人も見出しえないことを述べ、ただ下等動物の本能の中にのみ純粹な超絶主義の生き方——われわれの悟性より高い或るものの暗示が認められることを語っている。栗鼠や蜜蜂は、自分がしていることを意識せずに木の實をたくわえ、蜜をあつめる。こうして彼等は、利己心ももたず屈辱も嘗めることなく衣食を與えられるのである。目的と手段が一枚になりきつた、自然な、充實した、はげしい生命の élan は、ただ動物の本能の中にのみ存在すると説く Emerson の立場は、ここではただ控え目な暗示にとどめられているが、それが遠く指し示しているのは、Whitman の「自己を歌う」の一節に見られる境地ではなからうか。

私は動物になつて彼等と一緒に棲めるのではないかと思う、彼等はいかに静かで、

1 *Essays; First Series*, "Spiritual Laws."

2 *Ibid.*, "Intellect."

3 *Ibid.*, "Intellect."

4 *Ibid.*, "Spiritual Laws."

しかも自足している。

私は立ちどまり、いつまでも、いつまでも、彼等を眺める。

彼等は自分の境遇について、いらだつたり、泣き言をいつたりしない。

彼等は暗闇の中にめざめたまま横たわつて、自分の罪のために嘆くこともしない、

彼等は神への義務を論じて私に嘔吐を催させることはしない、

満ちたりていないものは一匹もない、所有慾のために氣が狂っているものは一匹もない、

他の動物の前に、何千年も前に生きていた同類のものの前に、膝まずくようなものはただの一匹もない。

地球のどこへ行つても、勿體ぶつたり不幸だつたりするものは一匹もないのだ。

こうして彼等は、彼等と私との關係を明らかにする、そうして私は彼等を受け入れる、

彼等は私自身の象徴を私のところへ持つてくる、それが彼等の所有であることをはつきりと示している。¹

1841年八月十一日、Maine州のWaterville Collegeで行われた講演「自然の方法」(“The Method of Nature”)において、Emersonは、自然のいとなみを、特定の目的や方向をもたぬ無盡蔵なエネルギーの氾濫として考え、人間の生もまた、特定の目的をもつことから必然的に生ずる自己限定や、行爲の成敗に對する不安から解きはなたれること——みずからの無限なエネルギーを行使する歡びの中に我を忘れる恍惚を、生の第一義の道であるとしているが、このような生は、動物の本能的生の中に實現されていると彼は考えたかも知れない。ともあれ、彼が人間の生の手本と考えた「自然」は、戒律でわが身をがんじがらめにした、拘束された「自然」ではなく、むしろ放肆な姿をした「自然」であつたことは注目されねばならない。

われわれの知る自然は聖者ではない。自然は飲んだり喰つたり、罪を犯したりしながらやつて来る。自然の寵兒——偉大な者、美しき者は、われわれの戒律の子ではない。日曜學校から生れるものでもない。自分の食物を秤にかけたり、几帳面に神の掟を守つたりすることはしない。²

「第二エッセイ集」に收められた「作法論」(“Manners”)において、Emersonが、英國社會に現われた「紳士」(gentleman)という人間類型の近代史に占める特異な意義を讃えたあとで、いわゆる「紳士的行儀作法」の核心をなすものは、「力」(power)に他ならないと言いきつているのは、以上の諸點との關連において考察するとき興味深い。

1 *Leaves of Grass*, “Song of Myself,” 32.

2 *Essays; Second Series*, “Experience.”

まず「力」がなければ、指導的階級なるものは存在しえない。政治においても商賣においても、亂暴者と海賊は、お喋りや勤め人より成功する公算が大きい。よき支配者の中には、まず、すくなくとも、動物精氣 (animal spirits) という、かけがえのない利點を生みだすほどの立派な動物が棲んでいなければならない。支配階級はこのほかにも多くのものをもたなければならないが、動物精氣だけは是非もつていなければならない。そして誰と附合うときにも、たくましい感じを與えなければならない。この力の感じは、聰明な人間をひるませるような難事をも、容易に成就させる。精力的な階級の社會は、友達同志の會合のときにも、宴樂のときにも、蒼白い學者のどぎもを抜くような勇氣と企圖にみちみちているのである。¹

“Dial”の創刊にあたつて、あまりにも幽玄な Transcendentalism の雰圍氣の中から、「たくましいヤンキー」(“a stalwart Yankee”) が果して出現するかどうかを危ぶんだ Carlyle に對して、Emerson のその後の思想の發展は、Yankeeism への鋭い傾斜を示していると言つてもよいであろう。

「第二エッセイ集」において、すでに超絶主義の山巔から下界へくだり始めた Emerson の姿を一番はつきりと傳えているのは、「經驗論」(“Experience”) の中の次の一節である。

よいものはすべて大道の上にある。われわれの人生の中間の地帯は、いわば溫帶である。われわれは、純粹幾何學や生命なき科學の、空氣の稀薄な、寒冷な世界へ登つてゆくことも、感覺の世界へ下降することも可能であろう。しかし、生活と思想と精神と詩の世界は、この兩極端の中間に存在する。…中間の世界こそ最上のものである。

1841 年七月の日記に見える次の言葉も同じ趣旨のものと解してよからう。

知力が偉大であればあるほど、それが占める空間もひろくなる。つねに極端の中にあつて、馬鹿騒ぎやあいくちのほかは何も眼にはいらぬ知力は、ちつぽけな知力である。

あまり高い聲を張りあげるな。低い聲で語るとき、われわれの聲は柔軟なものになるだろう。² 張りつめた絃は切れる。柔軟さこそ、われわれの生活において貴重なるものである。幽玄なもの、祕儀的なもの、異常なもの、深刻なものの中にはなしに、常凡なものの中に生活の眞實を求めよ。われわれはむしろ皮相なものの眞只中に生きているのだ。皮相なものの上をたくみに滑つてゆくこと——そこに本當の生き方がある。遠い過去や未來ではなく、現實の事態と人間關係をそのまま受けいれ、今日のこの時を満たして悔いないこと——そこに人生の幸福がある。

1 *Essays: Second Series*, “Manners.”

2 Cf. *Journals*, January 3, 1834.

IV

このような態度がさらに鮮明になつて来るのは、「代表的人物論」(*Representative Men*, 1850) においてである。この書において Emerson は、少青年期から現在にいたるまで、自分の人間形成にさまざまな意味で影響を與えた六人の人物 (Plato, Swedenborg, Montaigne, Shakespeare, Napoleon, Goethe) をとりあげて論じているが、Oliver Wendell Holmes の言葉を借りれば、「Emerson はこれらの人物に對して、彼の取扱う人物の顔のみならず自分自身の顔も映るような角度で、鏡をさしむけてみせた」¹ のである。對象に假託しておのれを語っているこの書は、間接的な自己告白の書として、六人の代表的な個性よりも Emerson 自身の本質を明らかにしている點で、彼の著作の系列の中で特殊な意義をもっている。

六人の人物は、いずれも Emerson の内奥の問題と緊密なつながりをもっているが、Emerson 自身からそれぞれ異つた間隔をおいて位置している。Shakespeare は少年時代からの愛讀書であつた。Goethe は Carlyle などを通して親しむようになり、五十數卷の全集をすべて讀破したが、Emerson がドイツ語で讀んだ唯一の作家であつた。Swedenborg は深遠な神祕思想家として、Emerson の世界觀の本質を形づくる「對應」(“Correspondence”) の觀念を教えてくれた。しかしこの書の中で最も精彩を放つており、また Emerson 自身が熱情を傾けて論じているのは、Plato と Montaigne と Napoleon の三人である。そして、客觀的にはともかく、主觀的に Emerson が一番身近かに感じていたのは Montaigne であつた。

Cotton 譯「モンテーニュ隨想錄」の端本が一冊、父の藏書の中から、子供のころ私の手に残された。それは永い間ほつておかれたが、何年も経つて、私が大學を出たばかりのとき、初めてこの書を読み、それから残りの幾冊かを買ひ求めた。私がこの書を友としていたころの歡喜と驚異とは、いまだに記憶に残っている。この書は、いつか前世にでも、この私が書いたのではないかと思われるほど、それほど眞實に私の思想と經驗とに訴えたのであつた。²

孤獨で、非社交的で、どんなに親しい友人に對しても或る距離をおいて交わつていた Emerson にとつて、「前世で自分が書いた本」と言ひうるほどの精神的血縁關係が意識されたのは、まことに異常な經驗であつたといわねばならない。事實、Emerson の日記の中から、Montaigne に言及している部

1 Oliver Wendell Holmes: *Ralph Waldo Emerson*, p. 197.

2 *Representative Men*, “Montaigne; or the Sceptic.”

分をとりだしてみると、彼の Montaigne に對する傾倒がいかなる程度のものであつたか、またその傾倒の内容はいかなるものであつたかが明らかに。それは、手放しの、溢れるような、共感の表白なのである。1831 年十二月二十五日、Emerson が二十八歳のときの日記——

荒けずりなおやじ共、ベーコンやミルトンやバークのような連中は、微に入り細を穿つということをしてない。だから自分はモンテーニュの方が好きなのだ。彼は、夜の講演や青年の討論からひろつた思ひつきを元にして何かをでつちあげるような、女々しいお座敷職人とはわけが違ふ。彼が馬の背に乗つていたり、館^{やかた}で一行をもてなしているときに見たり考えたりしたことを、腹藏なく話してくれるのだ。野卑な、半野蠻な卑猥さは、彼の書いた本の氣品をおとし、たしかに門外に放逐してやりたくなるようなものを感じさせる。しかし、彼の情趣の健康さ、判斷の鷹揚さ、恐れや依怙最負を知らぬ率直な眞實さとは、抱きしめてやりたいくらいだ。それは、香ぐわしい羊齒のように野性的で、すがすがしい。ヘンリー八世は、「男らしい男」に會うのが好きだつたという。實際たまには、純粹なサクソン人の切株といった男、野性的で道徳的で、本のことは知つてゐるが、心の中では、本に對して、自分の理性より下の正しい位置を興えてゐるといつた、そんな男に出會うのは、たまらなく嬉しい。とかく本というものは、理性を閉め出してしまふものだ。自分の理解力からではなしに記憶から物と言つてゐる人間にいたるところで出會う。こんな考えは、どうやらモンテーニュから拜借したものらしいが、そんなことはどうでもいい。モンテーニュを讀まなかつたとしても、自分は丁度同じことを言つたに相違ないからだ。

この引用の中に見られるところの、「情趣の健康さと判斷の鷹揚さ」「恐れや依怙最負を知らぬ率直な眞實さ」「香ぐわしい羊齒のように野性的なすがすがしさ」「男らしい男」などという言葉や、「記憶や本を通してではなしに、直接に現實に觸れて理性に訴ふる思考法」などは、Emerson が Montaigne のどんな部分に惹かれていたかを物語つてゐる。

さらに、1835 年八月八日、Emerson が三十四歳のときの日記は、彼が Montaigne の中に見出したものがどういう性質のものであつたかを、一層明瞭に示してくれる。

昨日ミシェル・ド・モンテーニュを讀んで愉しかつた。この偉大な、ずぼらな爺さんを、私は思いきり抱きしめる。彼は私の道義感を突いたり刺したりする——彼は野性的な、異教徒の血すじをひいた男だ。というのは、彼は神の「恩寵」(Grace)を受けていないという意味である。だが、第二卷に收められた彼の隨筆「殘酷について」の中で、カトウとソクテスを禮讃しているところは、われわれのために、ゆるんだぜんまいをもう一度巻いてくれ、キリスト教の戒めがなくとも道徳的でありうることを教えてくれる。むしろ、キリスト教の影日向の多い勤めぶりを恥じさせ、體面を重んじさせる。

ついでにもう一つ、1840年六月二十四日、Emerson が三十七歳のときの日記——

モンテーニュ。街頭の言葉はつねにはげしい。…私は白状するが、荷物運搬夫や荷馬車ひきの、威勢のいい悪口雑言の、痛烈なレトリックから、かなり愉快を覚える者だ。これを「北米評論」の一頁のかたわらに置いてみると、何と簡潔で活潑なことだろう。切れば血の出るような言葉なのだ。血管をそなえて、生きており、歩いたり走ったりする言葉なのだ。…私は現代人の中で、カーライルをのぞいては、プルータークとモンテーニュに比較しうるたくましさと活氣にみちた文章の書ける人を知らないのだ。

一口に言えば、異教的な美德、——野生的で、鷹揚で小氣味がよくて、率直で、男性的な美德に對する讃嘆であり共感であると言つてよいかも知れない。「モンテーニュの異教的な系統をひいた道義感」とか、「モンテーニュは神の恩寵を受けていない」とかいう言葉が、これを證明しているように思われる。

ところで Emerson が、「モンテーニュは神の恩寵を受けていない」と言つた場合、それは、Montaigne が「自然を超えた生」をその内部に持つていないという意味に解することができる。しかも注意しなければならないのは、Emerson が、この「神の恩寵を受けざる生」を必ずしも非難してはいないばかりか、そうした恩寵を受けない者の道德意識というものが、自分たちキリスト教徒のゆるんだぜんまいをもう一度巻き直してくれると、續けて語っている點である。

Emerson に従えば、Montaigne が最高の生と考えたところのものは、このように、「自然」と「理性」と人類の永い經驗に深く根ざしたものであり、その道德は「自然人」(natural man) の道德であつた。そして Emerson 自身もまた、自然というもの——人間の内にある自然も、人間の外にある自然も、これを熱愛するという點においては、Montaigne にまさるとも劣らぬものがあつたのである。生というものの正常な實現または成熟として、人間の自然性から生れる徳のうるわしさ——それは Emerson が物心ついて以來思い描いていたものであり、Montaigne によつて確認したところのものであつたと言ふことができる。「プルータークの英雄たちは、私の友人親戚である」¹ と言うまでに古代人の生き方を身近かなものに感じていた Emerson は、目立たない、凡庸な學生だつたハーヴァード大學在學時代に、すでに「ソクラテスの性格」と「倫理學の現状」という二つの懸賞論文を書いて當選

1 *Journals*, October 8, 1841.

し、古代のモラリストへの強い關心を示したが、この關心の延長線の上で、古代的人間の自然から生れる叡智を説いたフランスのモラリスト Montaigne とアメリカのモラリスト Emerson との出会いが行われたと見ることができよう。James Russell Lowell (1819-1891) が Emerson の本質を “Plotinus-Montaigne” という表現で規定したことは有名であるが、¹ Emerson の内部にある神祕家 Plotinus は、キリスト教の歴史性を否認することによつて、また、Emerson の内部にある、現世的叡智の人 Montaigne は、古代的自然への傾倒によつて、いずれも Emerson を正統的キリスト教の門外へ放逐することになったという事実もここで指摘しておかねばならない。

Montaigne は懷疑家であつた。それは、「平衡の位置を占め、且つ占め續けた」² という意味において懷疑家だつたのである。

あらゆる事實は、一面において感覺につながり、他面において道德につながっている。物を考える面白さは、この二面のうち一つが現われた際に他の面を見出すことである。即ち表面を示されて、裏面をあてることである。どんな薄いものでも必ずこの両面をもっている。…人生とはこの一錢銅貨を投げあげて、表か裏かをあてることである。われわれはこの遊びに決して退屈を感じない。他の面が出たのを見て、或いは表裏両面の對照に對して、つねに、かすかな驚愕のおののきを禁じ得ないからである。…この表と裏は、哲學の言葉で言えば、無限と有限、相對と絶對、現象と實在、その他多くの美しい名前と呼ばれている。

ところで、人間の大部分は、これら二つの面のいずれかに偏しているのが普通であつて、互いに他の陣營に屬する者を論難攻撃する。しかし、こうして睚み合っている兩者の中間の位置を占めるのが懷疑家である。彼は天地の間の一切のものを自分の檻の中に入れようとはしない。あらゆる眞理をわれこそ所有しているなどと空想することもしない。いずれの側にも言い分が澤山あることを承知しているからである。

今日の言葉で言えば、或る賢明な限界、兩極端の中間にあつて、しかもそれ自身積極的な性質をもつた或る状態、鹽でもなく砂糖でもないが、パリやロンドンを公正に評價し得るだけ現實世界とかかわりをもつ、或る嚴しい、有能な人間、しかも同時に、大都會に威壓されないで大都會を利用する底の、たくましい、獨創的な思想家——これこそかかる思索の領域を占めるのにふさわしい人間である。

成熟した人間は、三月の天氣のように變り易く、一つの意見から他の意見へ移つてゆくことを辭さない。どんなに純潔な徳の持主でも、自分の胸に耳を押しあててみれば、そこから、自分だけに聞取れる、人間的な不協和音を

1 Cf. James Russell Lowell: “A Fable for Critics.”

2 *Representative Men*, “Montaigne, or the Sceptic.”

聞きつける筈だ。聖者も天上の至福に飽満することがあり得る。天の幻を見る山頂にひざまずいた聖者は、祈禱から立ちあがりざま、天上の至福も偏頗な、不具なるものだと告白することがあろう。Montaigne は、舌を刺すような現實生活の味と大地のにはいをもっている。

モンテーニュの話しぶりは犀利である。世間のことも書物のことも自分のこともよくわきまえ、最上級の言い方をしない。決して叫んだり、抵抗したり、哀願したりしない。弱さもなく、痙攣もせず、誇張もなく、自分の皮膚から飛びだすことを欲せず、道化た眞似をせず、時間や空間を無視することもしない。どこまでも強健で堅實である。毎日の刻々を味わっている。…いつも平地を歩いて、高い所へ登ったり、低い所へ沈んだりすることは滅多にない。足の下に堅い大地と石とを感じずるのを好む。彼の著作は熱狂もなく、憧憬もない。満足して、自尊心を失わず、つねに中道を歩んでいる。

自分の知っていることを確實に知ること、手ごたえのあるもののみを所有すること、しかもそれを確實におのが所有とすること、化物を相手にすることなく、つねに現實の男女を相手にすること——かかる現實主義が、さらにきびしく徹底されて、冷酷な行動主義と化するとき、そこに現われて來るのが Napoleon である。Emerson が取りあげた六人の「代表的人物」の中で、Napoleon は、おそらく Emerson から最も遠い距離に位置している。彼は Napoleon の歐洲制覇を、「最も好都合な條件の下に行われた、良心なき知力の一つの實驗」と斷定している。にもかかわらず Emerson は、自分と對蹠的な人間を讃えることに自虐的な快感を覚えているのではないと思われるまでに、Napoleon の非情な行動性を禮讃しているのである。

Napoleon くらい行動の直接性と冷酷な知力とを結合させた人間は存在しなかつた。彼は、口舌の徒を畏怖させ、眞實を糊塗する連中を狼狽させる、峻厳なリアリストであつた。事の急所を素早く見抜いて、正確な抵抗點にわが身を投じ、他は一切顧慮しない。その勝利はすべて、戦場で獲得される前に、まず彼の頭腦の中で獲得されたものであつた。

ナポレオンは感情と愛情を悉く棄て去つて、自分の手と自分の頭で自分を助けようとした。彼には奇蹟もなければ魔術もない。彼は眞鑄と鐵と木材と土地と道路と建物と金銭と軍隊の工人、しかも首尾一貫した、聰明な名匠なのである。彼は優柔な文弱の徒ではない。自然力のように堅固に精確に行動する。…人々は、こんな人間の前では、自然力を前にしたときのように、屈服してしまうのである。

すでに「アメリカの學者」(“American Scholar,” 1837) において、Emerson は、行動というものの價值を高く評價した。行動は學者にとつて從屬的なものではあるが、また缺くべからざるものである。行動なくして學者は人

間たり得ず、思想は眞理へと結實することができない。ただ行動によつてのみ學者は世界を自分の存在の一部となし得る。Pragmatism の創始者の一人 William James は、「アメリカの學者」という講演のこの部分から特に強い感銘と深い示唆とを受けとつたと伝えられるが、この方向の極限に立つたのが Napoleon であつたと考えることができる。

V

對立するものを内部に包藏することによつて豊かにされた生命と、その生命を推進する「動物精氣」と、その生命の意圖を精確に實現する行動性と——中年以後の Emerson が探し求めたものは、かかるものを一身に兼ねそなえた人間類型ではなかつたかと思われる。

すぐれた知性とすぐれた良心とをもつた、天分の豊かな男は、男・女^{おとこおんな}とでも稱すべきものであつて、彼は、おのが存在に對して、他の人間ほど、女性という補足物を必要としない。¹

1833 年と 1847 年と兩度にわたる英國訪問によつて Emerson が確認した英國民と英國文化は、一つの國民と一つの文化の中に體現された、彼の理想的な人間類型であつた。

彼等〔英國人〕は好戰的というよりも男性的なのだ。戦争が過ぎると、假面が落ちて、情愛深い、家庭的な趣味が現われ、彼等をやさしい女性にしてしまう。... 英國人の心の中には男女兩性が共存している。... 英國人は、勇氣と情愛とを一身に結合した對立をよるこぶ。²

英國人のこうした合成的な性格は、おそらく、英國民が民族的に複雑な構成要素をもっているからである。言葉も、人間や土地の名前も、それを證據だてている。英國的なものはすべて、遠くへだたつた、相反する要素が融合して出来上つたものである。瞑想と實務的な手腕、活々した知性と固定した保守主義、戦争と商賣によつて地球の全表面に散らばりながら、一人残らずがホーム・シックにかかつている國民。英國は兩極端と矛盾によつて存在する國である。

英國人が他國民を壓して七つの海を支配し、過去一千年の間に最も成功を収めた國家をつくりあげた理由の最大なるものは、Emerson によれば、英國民の中には動物が棲んでいるからである。馬や犬に對する英國人の並々ならぬ愛情がそれを證明している。彼等の行動が本能に依存している度合いが強いのも、畢竟彼等の内部にいる動物のしわざなのである。しかもこの動物

1 *Journals*, June 14, 1842.

2 *English Traits*.

は、種がよくて、胸ががつちりして、汗氣がたつぷりあつて、すつしりと重たげな躰をしている。造化の神が意圖したのは、おそらく次のようなことだったのだ。

わがローマ人は滅びてしまった。わしの新しい帝國を建設するために、わしは、徹頭徹尾男性的な、けだものじみた力をもつた、粗野な民族を選ぼう。粗暴な雄どもがしのぎを削つたつて、かまうことはない。水牛と水牛を突殺し合わせろ。牧場は一番強い奴に與える。なぜならわしは、頑健な意志と筋力を必要とする仕事をもっているからだ。その意志をつねに敏活にさせておくために、或るときは肌を刺すような、また或るときは溫和な北風を吹かせよう。海がこの國民を他の國民から孤立させ、彼等を獰猛な國民へと結合させるようにしよう。¹

彼等の存在をみたすものは、たくましい精力と、荒々しい生活と、豐滿な肉體と、熟睡とである。彼等は、食慾不振の人間や、貞潔すぎる人間の判斷力を、あいつは駄目だと首をふつて、信用しない。

英國くらい「富」というものに絶對的な恭順の意を表する國はあるまい——と Emerson は言っている。粗笨な論理があらゆる英國人の魂を支配している。君が長所美點をもっているなら、それを君の美しい衣服と馬車と馬で示せ——という論理である。「富」は英國では一つの宗教になつていと言つてよい。手で觸れられる富と財産が一人の人間の價值と生存を決定する。だから、財産に對する彼等の執着には異常なものが認められる。彼等が進んで自分の血を流すのは、名譽のためでもなく宗教のためでもない。彼等が革命という手段に訴えるのは、財産、或いは財産というものによつて測られる權利が危殆に瀕した場合である。英國人はおだやかに自分の仕事のことだけを考へて毎日の生活の資を稼いでいるが、何者かが彼の賃金、彼の牛、彼の店に手を觸れでもしようものなら、最後の審判の日まで、死物狂いで闘うだろう。

これに反してアメリカ人は、富の象徴である大きな家屋その他を他人に示すとき内心忸怩たるものを覺えて、辯解がましいことを言う——と語っている Emerson の言葉をいま讀んでみると、われわれは、英國とアメリカという二つの國の地位をいろんな意味で顛倒させてしまった、その後の百年という歲月の力に感慨を催おさざるを得ない。しかし、1834 年二月十日、Emerson が三十歳のときの日記を讀んでみると、そこで彼は、多くの奴隷たちを使う豊かな環境で育つた南部の青年が身につけている、恐れを知らぬ、たくましい迫力と、ニュー・イングランドの貧しい牧師の子として生れた自分の、内

1 *English Traits.*

氣な、おどおどした自信のなさとを比べてみて、富が人間に與える最も大切なものは、奢侈の享受ではなくて力の行使なのだと語り、富が一人の人間の生涯の運命を決する力をもつことを率直に認めている。「人間は 富むために生れて來た。人間は、その能力を使用することによつて——思索と天性とを結合することによつて、否應なしに金持になる。財産とは知性の生み出したものである」「ドルは 價値ではなく、價値の象徴、終局において、精神的價値の象徴である」というような、手放しな「富」の禮讃が聞かれるのは後年の「處世論」(*Conduct of Life*, 1860) においてである。アメリカ國民のエネルギーが堰を切つたように西へ西へと氾濫し、天然資源の開発と富の蓄積が急速度に行われるようになった當時の國內情勢に呼應する言葉であるとしても、Emerson がこうした言葉を吐くこと自體には何の不思議もないことをわれわれは銘記しなければならない。

Emerson が Napoleon の中に見出した「頭腦と手との完全な結合」を、彼は英國人の中にも見出した。「事實」の前とあれば、いかなる屈辱をも甘受する英國人は、三段論法に終始する論理を好まない。彼等の生活の論理は、スープには鹽を、釘にはハンマーを、ボートにはオールをという、簡明直截な、「事實の論理」である。自分にとつてかけがえのないものが失われる危険に遭遇すれば、忽ち三段論法などかなぐり棄てるリアリストの論理、つねに目的を忘れない手段への感覺こそ、英國人に對して、近代世界の王者たる位置を與えたのだと Emerson は語っている。Emerson が心から讃嘆の聲を惜しまなかつた、このアングロ・サクソン特有の、明快な「事實の論理」は、また、百年後に、アメリカを現代技術文明の覇者たらしめたものに他ならない。

VI

傳えられるところによれば、Emerson の目鼻立ちは、どこか左右の均齊がとれていないものを感じさせたという。一方から見れば、彼の顔は俊敏眞摯なヤンキーの顔であり、他方から見れば、はるかなるものに思いをひそめる、夢みる人の顔であつた。現在 Concord の公立圖書館におさめられている Emerson の彫像を制作した一彫刻家は、制作にあたつて、Emerson のこの両面が、顔そのものを超えた或る一點で交叉するように心がけたと語っている。¹

1 Cf. Bliss Perry: *Emerson Today*, p. 1.

Emerson 自身は、「代表的人物」の中の「哲學者プレイター」において、Plato において初めて均齊のとれた魂がこの地上に生れ出た。人生の二つの要素、一と多、永遠と時間、必然と自由、休息と運動、東洋的な静と西洋的な動——これら 相対立するものが Plato において統一された、と語っている。Emerson にも同じような統一が認められるとは言えないであろう。しかし Father Taylor が言つたように、Emerson の精神のメカニズムからは、どんなに耳を澄ましても、不愉快な軋音が聞えて來ないことだけは事實である。

(本稿は文部省科學研究助成金による研究の一部である)

Summary

Emerson, who has been generally considered the leader of the Transcendentalist movement, had duality of idealism and Yankeeism in his thought, which can be found even in the fundamental ideas of his Transcendentalism itself. As his pragmatic tendency developed with years, he gradually came down from the summit of mysticism to the highway of everyday life. Maturity of his thought was thus marked by his growing concern with the reality of America as well as with the actual situation of human existence. It was this fine combination of shrewdness of a stalwart Yankee and high idealism of a visionary that made Emerson a unique figure at the formative period of American culture.